

2026.02.15.

「あなたを離れてどこに行きましょう」

旧約 詩編 139 編 1～10 節

新約 ヨハネによる福音書 7 章 1～13 節

1. はじめに

今朝の礼拝は私共の教会の創立を記念しての礼拝です。私共の教会が創立されましたのは、1925年(大正14年)2月18日です。私どもの教会は日本基督教会という長老派の教会によって伝道が開始されました。現在、私共の教会は日本基督教団に属しておりますが、この日本基督教団というのは30余派の福音主義教会が、1941(昭和16)年に合同して成立したものです。私共の教会は、それに先立つこと17年、1924年(大正13年)の日本基督教会鎮西中会の中会常置委員会決議に基づいて、当時の都城教会(現在の日本基督教団都城城南教会)の園部牧師と、鹿児島教会(現在の日本基督教団鹿児島教会)の森山牧師の両氏が派遣されまして、この宮崎の地における開拓伝道が始まりました。そして、吉田穰太郎牧師を初代牧師として迎え、日本基督教会宮崎伝道所として主の日の礼拝が始まりました。今週の2月18日で創立101周年となります。昨年の2月18日が教会創立100周年だったわけですが、あいにく無牧師の時期であり、錦ヶ丘教会の川島直道牧師が100年記念礼拝をしてくださいました。現在長老会では、少し遅れましたけれど、100周年記念事業を計画しております。主な事業は三つあります。一つは、既にチラシが皆さんのお手元にあるかと思いますが、中村証二さんを招いての「創立百周年記念リードオルガンコンサート」、ならびにオルガン講習会とレッスン。二つ目に開地亨一兄の絵のデジタル保存。そして三つ目に100周年記念誌の発行です。既に動いているものもありますが、2026年度の教会総会において事業の概要と予算を議案として提出し、ことを進めていくこととなります。百年誌には皆さんの文章も載せたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

2. 創立101年を迎えて

百年というのは、教会の歴史としては特に長いわけではありません。諸外国には千年を超える教会がいくらでもあります。しかし、100年という時の流れは決して短いものではありません。この100年の間に日本の状況も大きく何度も変わりました。伝道が開始された時期は大正デモクラシーの時代でした。それから軍国主義へ、そして先の大戦が始まり敗戦となりました。そして戦後のキリス

ト教ブーム、高度経済成長そして長い経済的停滞と少子高齢化という現在に至ります。教会はこの社会の中にありますから、その時代の風から無縁でいることは出来ません。様々な風が教会の中にも吹き込んできます。牧師も代わり、信徒も世代交代をし続けてきました。しかし、どのような時代の風の中でも、私共の教会は主の日の度ごとに礼拝を捧げ、聖書の御言葉に聞き、御国に向かっての歩みを続けてまいりました。それは今も変わりませんし、これからも変わることはありません。教会にとって良い時代も悪い時代もあります。しかし、どのような時代であっても、私共は神様の御前に立って、誠実に、為すべきことを精一杯為し、御国を目指して歩いていく。その営みは少しも変わりません。使徒パウロは若い愛する同労者テモテにこう告げました。「4:2 御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。」(第二テモテ 4:2) 口語訳では「4:2 御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。」こちらの方が、私にはなじみ深いのですが「時が良くても悪くても」です。本当にそうです。私共は時代の風というものを感、それに対応していきます。それは悪いことではありませんし、当然のことです。私共の教会もホームページを作ったり、イン스타그램を始めたりしています。しかし、その時代への対応の根底には「時が良くても悪くても」という姿勢に貫かれていなければならないでしょう。時が良くても悪くても、その「時」を支配しているのは主なる神様ご自身だから、御心を求めて、私共はただ為すべきことを、自分たちが出来るあり方で、精一杯なしていく。その営みの連続が、100年間の間この教会では為され続けてきたということです。

3. 何があっても、どこに行っても

今、詩編の 139 編の始めの所をお読みしました。詩編の詩人は、神様が自分の全てを知っておられると繰り返します。「主よ、あなたはわたしを究め/わたしを知っておられる。 139:2 座るのも立つのも知り/遠くからわたしの計らいを悟っておられる。 139:3 歩くのも伏すのも見分け/わたしの道にことごとく通じておられる。 139:4 わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに/主よ、あなたはすべてを知っておられる。」詩人は、自分が何をしても、どこにしようとも、何を思っようとも、神様は全てをご存じですと歌います。それは、「知られてはまずいことさえも神様はご存じで、これは困ったものだ」と歌っているわけではありません。続けて「139:5 前からも後ろからもわたしを囲み/御手をわたしの上に置いてくださる。 139:6 その驚くべき知識はわたしを超え/あまりにも高く到達できない。」と歌っていることから分かるように、全てをご存じである神様がその恵みの御手、救いの御手をもって私を囲んでくださる。だから、「何を心配する

ことがあろうか」と歌っているわけです。神様は私の今まで歩んできた道も、現在の状態も、これからのことも、全てをご存じです。その知識の広さ、高さ、豊かさは、私共の想像を遙かに超えています。その知恵と知識と御力をもって、神様は私を守り、支え、導いてくださる。ですから、私共は何も恐れることはありません。

更に詩人は歌います。「139:7 どこに行けば／あなたの霊から離れることができよう。どこに逃れば、御顔を避けることができよう。 139:8 天に登ろうとも、あなたはそこにいまし／陰府に身を横たえようとも／見よ、あなたはそこにいます。 139:9 曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも 139:10 あなたはそこにもいまし／御手をもってわたしを導き／右の御手をもってわたしをとらえてくださる。」 実に、私共はどこにいようと、神様の御前から離れることは出来ない。この世界の全ては神様の御手の中にあるからです。「陰府に下ろうとも」というのは、たとえ死んでも、ということでしょう。それでも私共は神様の御前から離れることは出来ません。天に登ろうと、陰府に下ろうと、海のかなたに行こうとも、神様は私を捕らえて放さず、御手をもって導いてくださいます。宇宙船に乗って月に行っても、そこにも主なる神様はおられます。私共は、「私は信仰者なのだから、イエス様に救われたのだから、神様の御前にしっかり立ち続けなければならない」と、考えます。それはとても真面目な信仰の態度あり、良い心根です。しかし、私共はもっと大らかに、神様の御力、偉大さに信頼して良いのです。私共が真面目に神様の御前に歩むから、神様は私共と共におられるわけではありません。私共がどこにいようと、どんな状況の中にあろうと、神様は私共を捕らえ、導き、私共と共にいてくださっています。私共が気づこうと、気づくまいと、神様は私共と共にいてくださっています。私共の教会が、この地に 100 年間立ち続けたということは、この神様の御手による守りが確かにあったことを示しています。今朝、私共はそこに目を注がなければなりません。

4. 仮庵の祭り

さて、共々に読み進めているヨハネによる福音書ですが、今日から 7 章に入りました。6 章はカリヤヤでの出来事でしたが、7. 8 章の舞台はエルサレムです。1 節に「7:1 その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。ユダヤ人が殺そうとねらっていたので、ユダヤを巡ろうとは思われなかった。」とありますように、イエス様を殺そうとねらうユダヤ人達が現れてくるという、とても厳しい時をイエス様は迎え始めていました。もう、十字架への時が近づいてきていることをここから分かります。

そして、仮庵の祭りが近付いてきました。この祭りは現在の私共の暦では 9 月か 10 月にあたる

時期に行われていた祭りです。時期から分かりますように、秋の収穫を感謝する祭りでした。しかし、ユダヤの祭りはそれだけでは終わりません。収穫感謝の祭りというのは、自然な心の動きから生まれてくるもので、このような祭りは全ての宗教にあります。しかし、ユダヤの祭りはこれに「神様の救いの出来事を記念する」という意味が加わります。これはキリスト教においても同じです。イースターはイエス様の復活、ペンテコステは聖霊降臨、クリスマスはイエス様の誕生というように、イエス様による救いの出来事を記念するのがキリスト教の祭りのあり方です。この仮庵の祭りというのは、何を記念する祭りであったかといいますと、イスラエルの民が出エジプトをして神様によって救われた、あの荒野の40年の旅を記念するものでした。それはレビ記の23章に記されています。仮庵の祭りというのは、仮の庵を造りましてそこで7日間生活する。そのことによって、出エジプトの荒野の旅を思い起こすという祭りです。この「仮庵」というのは、木の枝などで造った文字通り仮の小屋です。中々イメージするのが難しいかもしれませんが、子ども達が竹藪などに造る秘密基地のようなものをイメージしていただくと良いのではないかと思います。この仮庵祭りは過越の祭と七週の祭りとともにユダヤ教の「三大巡礼祭り」の一つでした。

イエス様はこの祭りに参加するために、エルサレムに行ったのか、行かなかったのか？結論を言えば「行きました」。しかし、堂々と行かれたのではありませんでした。10節を見ると「**7:10** **しかし、兄弟たちが祭りに上って行ったとき、イエス御自身も、人目を避け、隠れるようにして上って行かれた。**」不思議な表現です。どうして、イエス様は人目を避け、隠れるように行かれたのでしょうか。

5. わたしの時

その理由は6節、8節で繰り返されており、イエス様の「**わたしの時はまだ来ていない。**」という言葉に示されています。イエス様が「わたしの時」と言われたのは、イエス様がエルサレムにおいてご自身がメシア、キリストであることを人々に明らかに示す時のことです。それはどういう時かと言えば、イエス様が十字架にお架かりなられる時であり、復活される時です。その時はまだ来ていないとイエス様は知っておられました。ですから、イエス様は「**この祭りには上って行かない**」（8節）と言われました。

誰に向かって言われたかといいますと、イエス様の兄弟達です。イエス様にも兄弟がいました。有名なのはイエス様が天に上られてから、エルサレムにおけるイエス様の弟子たちをまとめていた「主の兄弟ヤコブ」です。ヤコブがこの時のイエス様の兄弟の中に居たかどうかは分かりませんが、3.4節にイエス様の兄弟たちがこのように言ったと記されています。「**ここを去ってユダヤ**

に行き、あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。 7:4 公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい。」イエス様は 6 章で「5 千人の給食」という驚くべき出来事をされたわけですが、このイエス様の兄弟は「こんな田舎でやっていないで、エルサレムに出て、しかも巡礼者達がたくさん集まっている仮庵の祭りでやったら良いじゃないか。そうしたらいっぺんに皆に信じてもらえるだろう。」そう言ったわけです。なるほど、と思いませんか。ところが、聖書は全く意外なことを告げるのです。5 節「7:5 兄弟たちも、イエスを信じていなかったのである。」どういうことでしょうか？兄弟達はイエス様がメシア、キリストであるとは信じていなかった。だから、「巡礼者達が集まってくるエルサレムに行って、皆の前で奇跡でも何でもしたら良い。どうせ出来やしないだろうし、皆はあんたのことを信じやしないだろうけど。」ということだったのでしょう。兄弟達は一番近くでイエス様を見ていた人たちです。それがイエス様を信じない。どうしてなのか、良く分かりません。ただ、このことは言えるのではないのでしょうか。「まだ、時が来ていなかった。」つまり、イエス様がメシア、キリストであることが明らかにされる時、神様が定められた時、それがまだ来ていなかった。だから、兄弟であろうと、誰であろうと、12弟子のような神様が召された者にしかイエス様を信じる信仰は与えられることはなかった、ということなのでしょう。

6. 神様の時が満ちるのを信じて

ここでよく考えなければならぬことは、イエス様が「わたしの時はまだ来ていない」と告げられたことです。イエス様は「自分の時」がやがて満ちることを知っていました。そして、それは今ではないということも知っていました。また、その時が来た時、ご自分が十字架にお架かりなることも知っておられました。しかし、イエス様の兄弟達は、そのような時があるということを知りませんでした。まして、イエス様が自分の赦しのために十字架にお架かりになることなど、考えたこともありませんでした。ただ、兄弟達は状況から判断し、イエス様がメシア・キリストであることを明らかにするには今が良い時だろうと考えた。それは、「この株を買うのは今が良いだろう」というのと同じです。自分の見通しや予測のもとに明日があると思っているわけです。時を支配しておられる神様がおられることを知らないからです。しかし、イエス様の兄弟達が考えた「良い時」は、神様が定めた時、イエス様の救いが成し遂げられる時、イエス様が救い主であることが明らかにされる時ではありませんでした。イエス様はそれを知っておられました。

私共はどうでしょうか？今がどういう時なのか、弁えているのでしょうか？残念ながら、私共には今が神様の御心の中でどのような時なのか、それを知ることは許されておられません。これは神様が

定められた人間の限界というものです。人間には、明日何が起きるのかさえ良く分かりません。天気予報はよく当たるようになりましたけれど、私共は自分の体が明日どうなるのかも分かりません。そして何よりも、イエス様がいつ来られるのかを知りません。明日、イエス様は来られるかもしれませんが、私共が地上の生涯を閉じられるまで来られないかもしれません。それは誰も分かりません。しかし、イエス様を信じる私共にはっきり教えられていることがあります。それは「全てには神様の時がある」そして「神様の時が満ちる時がある」ということです。神様が永遠のご計画の中で出来事を起こされ、救いの御業が為されるのは、神様ご自身が定められた時が満ちた時です。その時がいつ、どのようなあり方でおとずれるのか、私共は知りません。

では私共はどうすれば良いのでしょうか？それが、最初に申しあげました「時が良くて悪くても」為すべきことを、出来る仕方で、精一杯為していくということです。私共の教会はそのようにしてこの地に100年立ち続けてきました。そしてこれから立ち続けていきます。人は「これをするなら今だ」といった具合に、その時代、その時を様々に理解し、判断します。それも良いでしょうし、必要なことでもありましょう。でも、もっと大切なことがあります。それは「神様の時が満ちることを信じて、どんな時でも、為すべきことを、出来る仕方で、精一杯為していく」ということです。どんな時でも、神様が共にいてくださいますから、安心して、為すべきことを為していけば良いのです。神様は全てをご存じなのですから、心配は要りません。神様の御業も、神様の時も、私共の見通しや予測の外にあります。私共の教会の明日は、神様の御手の中にあるからです。神様を小さく見積もってはなりません。つまり、神様をなめてはいけません。神様は天地を造られ、全てを御支配され、御心のままに全てを為されるお方なのですから。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

今朝、私共はこの教会の101周年を記念して主の日の礼拝を捧げ、御言葉を与えられました。私共はどこに居ても、どのような状況の中でも、あなた様の御手の中に生かされてきましたし、生かされております。そのあなた様の慈愛に満ちた御手の中で、あなた様の御許に先に召された兄弟姉妹達も、この地上での歩みを為し続けました。ありがとうございます。私共がこの宮崎の地にあつて、あなた様の時が満ちることを信じて、為すべきことを、精一杯為していくことが出来ますように。いよいよあなた様の恵と真実を証しし続けていくことが出来るよう、信仰を支え、愛を満たして行ってください。ただ、あなた様の御名だけが誉め讃えられますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン